

広島県知事賞，少年の主張全国大会努力賞



人間とは，そんなにえらいの？

広島市立国泰寺中学校

1年 岸田 寧々

「シムが死んだ。」電話口で聞いたそのたった一言で私は涙が止まりませんでした。

シムとは祖母の家で飼っている猫のことです。二〇一三年七月二十二日，家族の一員としての二十二年間に幕を下ろしました。その日は母も私もシムとの思い出で頭がいっぱいでした。いつも一人で外にお散歩に行っていたこと，そのお散歩で他の猫とけんかして，おなかを触ると嫌がったこと，手を口元に近づけるとザラザラとした舌でなめてきたことなど，たくさんの思い出がありました。最後のお別れのとき，私は「二十二年間，ありがとう。お疲れ様。」と言いました。私たちとの二十二年間，シムはいい思い出をたくさんもって旅立ったと思います。

一方で，悲しい生涯を送らなければならなかったペットがいます。虐待や飼育放棄を受けたペットたちです。こんな本を読みました。保健所で「引き取ってほしい犬がおる。飼い主の言うことは何も聞かん。家族に噛みつくとんでもない凶暴犬よ。」職員が見ると，その犬は人間をととても怖がっていました。「きっと虐待が原因だ」と思った職員は「これが凶暴な犬ですか？」と言いました。「こんな馬鹿犬はもういらん。」それを聞いた職員は怒って「ここに預けた犬がどうなるのか知るとるんですか。死ぬんですよ。」「かまわん。」読んでいてあまりの無責任さに腹が立ちました。

どうしてこういうことをしてしまうのでしょうか。「ペットを飼おう。」人間がそう思うとき「可愛いな。そばに置いておきたい。」きっとそんなきっかけがあったと思います。しかしその延長に「それは生き物だから食事もしればフンもする。家を汚すかもしれない。一緒に生活するために愛情のあるしつけが必要になる」ということがついてくるのに，そのことを見ようとしていないのだと思います。

そういえば，母は猫を拾ってきたのですが，ペットをペットショップで買う場合もあります。そう，買うのです。このとき，ペットは商品です。しかし，決して自分を癒すための道具ではありません。生き物です。

買う人は想像できるでしょうか。あのペットショップのショールームの中にいるペットたちがなぜ可愛らしく見えるのか。無邪気にじゃれあったり，心地よく眠っている背景に，きっと食事や下の世話も全部含めて動物が大好きなショップの人への信頼があるからです。

そして買った人は想像できるでしょうか。その信頼が，飼い主に引き取られてから崩れ去っていくショックを。ただ単に人間を癒す道具として扱われ，人間に対する憎しみしか抱くことができなくなるのです。苦しい思い出だけを背負っていかなければならないのです。あの，虐待で家族に噛みついた犬は，きっと自分の身を守るために必死だったのだと思います。そして，最後はその人間によって殺処分されるのです。

ペットを「可愛い」という一面でしかみられない。それは，自分に都合のよいことしか見ようとしなくていいのだと思います。そこに他の立場を考える姿勢はありません。私はこうした自分本位が，想像力の欠如が，やがては人間の社会をすさんだものにしていくのではないかと思うのです。

（公社）青少年育成広島県民会議会長賞



ことばを伝える

三次市立布野中学校

2年 丸川海音

「君はアナウンサーに向いているかもね。」小学生の時、アナウンサーの方の特別授業でこう言われました。小学生レベルだとしても嬉しく、その喜びとアナウンサーへの憧れもあって、中学校に入学すると、迷わず放送委員会に入りました。

主な活動は、給食の時の放送です。初めは機械の使い方もよくわからず、ミスの連続でした。でも、先輩たちに丁寧に指導してもらい、次第に慣れてきました。遠くから笑い声や反響の声が聞こえてくることもあり、自身がついてきました。

二年生になると放送委員会の副委員長として、原稿を書き、新入生の指導もするようになりました。もはや、マイクの前で緊張することもなくなり、1回の放送など何でもないことになっていました。そんな時、「最近の丸川の放送、つまらんで。難しい言葉がおゆうて、何言よるかようわからんよ。」友人にそう言われ、僕は怒りを覚えました。難しいだって？君たちの理解力がないだけだろ！

ところが別のある日、今度は放送担当の先生にも、こう言われました。「君は聞き手を意識して言葉を伝えている？」またしても、何で僕ばかり言われるんだ！

そこで、さすがの僕も、ちょっと反省してみることにしました。思えば、放送に慣れるにつれ、僕の姿勢は傲慢になっていなかったか。ミスなく読めるからといって、初めは繰り返していた練習も、今は一度目を通して終わり。そんなことで、みんなの心に言葉は伝わっていたのだろうか。

そんなある日、「故郷を知ろう」という新しい企画を任されました。地域の広報誌から抜き出して読めばいい、という軽い気持ちで引き受けました。でもいざ、原稿を書こうとすると、先生の言葉が頭をよぎります。聞き手を意識するとは？その疑問はすぐには解決しませんでした。とりあえず、資料を付箋だらけにしながら読み、内容を理解していきました。そして、友人の言葉を思い出し、難しい言葉は省こうと、辞書とにらめっこして原稿を書きました。さらに、聞き取りやすいように、ゆっくり読む練習もしました。

放送当日は、心をこめて放送しました。そして、友達に感想を聞いてみました。「ああ、面白かったよ。」たった一言の感想でしたが、僕の苦労は、大きな喜びに変わりました。

その時気づいたのです。「言葉を伝える」とは上手く読めるか、ではなく、聞き手のことを考え、耳を傾けてもらうよう努力する、その姿勢こそが大切なのだと。たとえ校内放送でも、それはテレビ放送などと何の変わりもないのです。

考えてみれば、言葉ひとつでもいじめにつながることもあります。また、メールで送られた言葉が原因で事件に発展することもあります。一度発信した言葉は、必ず受け手が存在する。このことを忘れてはいけません。

放送委員の仕事を通して、言葉を伝えることの難しさと、聞き手の立場で考えることの大切さを実感しました。これからも、様々な人と関わる機会が増えてきます。より良いコミュニケーションのために、言葉の重みを考えて生活していきます。

広島県中学校話し方連盟会長賞



言葉のことばかり考えて

安芸高田市立高宮中学校

3年 平 田 怜偉菜

今朝、時間がなくて朝食食べられず、チョーショックでした。なので、チョコをちょこっと食べて来ました…。

私にはお聞きのような悪癖があります。しょ～もないダジャレ、失礼な言い方ですが、「おやじギャグ」を言う癖です。思いついたら即言い、学校でも必ず一日一回は言い、真夏でも教室を真冬のように凍らせています。

こんな風に言葉と戯れる癖のある私は、当然の流れで言葉について、興味を持つようになりました。言葉は、本当に多様で、とても面白いものだと思います。例えば、最近私が気になる摩訶不思議な言葉遣いは「政治家が使う言葉」です。「そう考える方向性もないわけでもないのでございます」等の言い方…。一体 YesNo どっちなのか…。難しい言葉、回りくどい言い回し。まるで明確に言ったら負けのゲームみたいです。聞いていてイライラしますが、ある意味特徴的な話し方ではないかそう思わないわけでもないのでございます。

さて今、私達が触れている言葉を考えると、例えばテレビ等で氾濫する言葉は、からかい、中傷の言葉が多いように思います。特にインターネット上での言葉の遣われ方はひどい。相手をおとしめようという悪意に満ちています。その他の場面でも言葉が軽く扱われ、気持ちを考えずに発言しては人を傷つける…。現に言葉による中傷で自ら命を絶つという事態までも引き起こされています。

それでも私は、前向きな言葉には悪意をも超越する凄い力が秘められていると信じます。そう思うきっかけとなったのは、ある少女のスピーチ。そのスピーチが私に言葉の力の凄みを感じさせてくれたのです。その少女の名はマララ・ユスフザイさん。パキスタンに住む十六歳の女の子。彼女は女性が教育を受ける権利についての運動をしていました。そんな彼女をテロの魔の手が襲います。彼女の運動に反対する武装集団が当時十五歳の、無抵抗の彼女を銃で襲い、頭を撃ち抜いたのです。

頭を撃たれながらも何とか一命をとりとめ、奇跡的に回復したマララさん。テロに屈することは決してありませんでした。銃という武器に対し、マララさんは言葉で敢然と闘います。子どもの教育の権利について、ニューヨーク国連本部で、言葉という方法で、世界に向けて、堂々とスピーチしたのです。言葉でのスピーチはテロリストの銃弾では届くことのないくらい広がっていきました。まさに世界中へ。その中で、マララさんは言います。「私達は、自分達の権利のために声を上げ、そして私達の声は変化をもたらしました。自分達の言葉の力を、強さを信じましょう。私達の言葉は世界を変えられるのです。」と。

私は心震えました。このスピーチ自体に前向きな言葉の力が詰まっています。ここには言葉の美しさ、強さ、優しさがあふれ、さらにマララさんの人間性までも表れています。

今中学三年生の私にとっては、言葉は発展途上の財産です。マララさんの言葉「本を手に取りペンを握りましょう。それが私達にとってもっとも強力な武器なのです。」を心に留めておきます。言葉は銃とは違う自由をもたらす武器。もっと沢山の本と出会い、自分の言葉を増やしていきます。言葉を増やすことは、自分の考えを深く広くできること。自分が迷った時の道標となってくれるはずです。それは自分の世界を広げることです。これからも言葉のことばかり考える時間を持ちながら、どんどん自由になっていきます。

国際ソロプチミスト広島会長賞



一人じゃない

広島市立大州中学校

3年 岡本知奈

「知奈なら絶対できるって。うちらがついとるもん。」去年の秋、友達の言葉を胸に、私は演説台に立ちました。

1年生のとき、生徒会役員になってから生徒会長はずっと私の憧れでした。行事のときみんなをひっぱる姿。代表してあいさつをする姿。すべてが輝いて見えました。憧れはやる気によって変わっていました。そして「やりたい」という気持ちだけを頼りにポーンと会長に立候補したのです。

選挙はクラスみんなに推薦の署名をしてもらうことから始まりました。男子から女子まで、なんとかクラス全員分の署名をもらうことができました。署名をもらいながらクラスメイトたちに言葉をもらいました。「がんばってね。」嬉しかったのですが、同時に不安にもなったのを覚えています。署名をしてもらったからには当選しなくちゃいけない。嬉しいはずの言葉なのに聞くと肩が重くなっていくようでした。そんな気持ちの中、朝のあいさつ運動を始めました。朝八時から行う校門でのあいさつ運動。家が遠い人からすると来るには早い時間です。「来て下さい。」と呼びかけてはみたものの、行ってみると来ていたのは仲の良い数人だけ。心細い人数でした。それでもがんばって、「二年E組岡本知奈をよろしくお願いします。」と呼びかけていると、クラスメイトの1人が登校してきました。ちょっと気まずい気持ちになり、私は思わず目をそらしてしまいました。ところがその友達は教室には行かず、その場にかばんをポンと置き、呼びかけの輪に入ってきました。「遅れてごめん。これからはうちががんばるけ、なにかできることがあったらなんでも言ってね。」と言いながら。その後も門をくぐったクラスメイトたちはその場にかばんを置いては、呼びかけの輪へどんどん入ってくれました。気がつくと、正門は私の名前の大合唱です。「二年E組岡本知奈に投票お願いします。」そこには、「がんばってね。」といったクラスメイトの姿ではなく、「一緒にがんばろう。」と言ってくれる仲間の姿がありました。そしてむかえた当日。演説台に上り、全校生徒を前にしても平気でした。1人じゃないからです。仲間がいるからです。クラス全員の思いをのせたスピーチは大成功を収めました。当選確実だ。そんな思いで仲間と迎えた翌朝の結果発表。しかし、聞こえてきたのは私の名前ではありませんでした。希望が絶望に、笑顔が涙に変わった瞬間でした。生徒会長になれなかったことよりも、一緒にがんばった仲間達の期待を裏切ってしまった。そんな気持ちでいっぱい、ただ泣きながら謝ることしかできませんでした。でも仲間達は目にいっぱいの涙をためながら私に言いました。

「自分を責めんでいいんよ。うちらは知奈とここまでがんばったことを誇りに思っとるし、このこと一生忘れんけん。」この言葉は私の胸の奥まで響き、私にもう一度がんばる勇気を与えてくれました。私は今、厚生委員長をやっています。

選挙を通して私が学んだこと。それは私にはたくさんの仲間がいるということ。一つの目標に向かい、一緒に努力する道のりで仲間になっていくということ。仲間は希望をくれます。勇気をくれます。仲間は宝です。私はこのかけがえのない仲間と共に目標に向かいつらさや喜びを共にしながら楽しく充実した学校生活を築き上げていきます。

広島清流ライオンズクラブ会長賞



あたり前！？

広島市立大塚中学校

3年 古谷 美穂

「私には、お母さんがいないんだよ。」と、友達と家族の話になった時、このように言うことがあります。すると友達は、「ごめんね…」と謝ります。母がいなくても寂しくない、と言うと嘘になってしまいますが、そこまで重く気にはしていません。家族の大切さに気づき、当たり前の生活について深く考えることができたから。

私は幼い頃、両親が離婚して父に引きとられました。それから今まで、父と祖母と祖父が私を育ててくれました。食事の用意から遊び相手まで、いつも私の為に動いてくれています。私にとって、父と祖母と祖父と過ごす生活はとても楽しく幸せです。

そんな中、小学生、中学生と大きくなるに連れ、テレビを見ていて気付くようになったことがあります。それは「誰かが他の誰かを殺した」というショックなニュースの多さです。その中には、私と同年ぐらいの人が自分自身の家族を殺してしまったというニュースもありました。その事をテレビで知った私は、「いつも一緒にいる大切な人なのに、何で。」と疑問をいだく反面、「私もイライラして、家族に八つ当たりしてしまっているからなあ。」と思いました。中学生は大人になりかけている時期であり、多くの事をかかえてイライラしたり、文句を言ってしまうことがあります。そんな時、一度は自分の母や家族に八つ当たりをしてしまった事があるのではないのでしょうか。でも、もう少しよく考えてみてください。八つ当たりを受けた家族はその後、あなたに対してどのように接していますか。けんかになってしまったとしても、時間が経てば食事を用意してくれたり、普通に学校へと送り出してくれるのではないのでしょうか。そんな風にいつもと変わらぬ当たり前の生活に戻っていると思います。しかし、よく考えるとそれは、当たり前ではないのかもしれない。もし、あなたが誰かにイライラをぶつけられたらどうですか。少しは嫌な気持ちになります。その後あなたは、イライラをぶつけた方の人に何かをしてあげようと思いますか。私は、そう思うことができません。みなさんもイライラをぶつけられる側だったら、なかなかその人の為に何かをしようとは思えないのではないのでしょうか。でも、あなたの家族はきっとどんなにけんかをして、不満をぶつけても、またいつもと同じように接してくれます。

ある時に父にしかられて、私はすごく嫌な気持ちになったことがあります。その時父は、「美穂の為に思って怒る。決して美穂が嫌いなわけじゃない。家族だから。何かあったら相談して。美穂の為に動くから。」と私に言いました。みなさんの家族も言葉で表していないとしても、きっとあなたの事をいつも考えてくれています。みなさんにその事を頭において生活していほしいです。

私達の周りには当たり前になっている事がたくさんあります。家族との生活もその一つかもしれません。でも、それで終わりにしないでください。私にとって母が家にいることは当たり前ではないし、とても幸せなんだろうと思います。あなたが当たり前だと思っている事でも、本当は当たり前ではない事があります。だからこそ、感謝を心に、言葉にしていく必要があると思います。日常にたくさん転がっている当たり前という名の石を感謝で包みこんでみてください。きっと、あなたにとって宝石のように輝く楽しい充実した毎日になっていると思います。

優 秀 賞



受け継ぐ

呉市立白岳中学校

3年 新 田 瑞 穂

「わしはだめじゃけえ、棺桶用意してくれや……。」痛みで唸る弟の側で、姉は泣くしかありませんでした。

昭和二〇年八月六日八時十五分、私の祖父は校庭で被爆しました。旧制中学1年の時でした。被爆直後の閃光と爆風後、祖父は無意識に自宅を目指したと言います。

「お前、大丈夫なんか……。」帰宅途中話しかけてきた友人の視線を追って自分の右半身を見ると、黒焦げのただれた皮膚……。同時に強い痛みが襲ってきました。「体半分を、もぎ取ってしまいたい……。」そんな衝動に駆られました。…体半分になっても死にたくないと思いながら帰宅し、姉に吐いた弱音は、今でも忘れられないと言います。

その後傷も癒え、祖父は広島で就職し、戦後の復興に向けて精一杯働きました。

そんな中、他県に嫁に行った幼なじみが帰ってきました。嫁ぎ先の姑さんに火傷を見られ、「ピカがうつる。近寄らんで。」と、言われたそうです。「体の痛みはいつか癒えるが、心の痛みは続くんじゃない……。」祖父は、小学六年の私に優しい笑顔で語りかけます。

祖父の思いに答えるため私に何ができるのか考え始めたそんな矢先、母と海外旅行に行くことになりました。アメリカからメキシコへと国境を歩いて越えた時、私たちが見たのは、さっきまでの華やかな街とは違う色のない世界でした。その街「ティファナ」に入ったとたん子どもたちに囲まれました。ぼろぼろの人形を抱いたまま両手を差し出す女の子。「ものはあげちゃだめ。」と、私の手を強く引き、母が言います。「どうしてあげちゃいけないの……。」母の手をふりほどくと同時に、私の口をついて出た言葉でした。

「『今の生活が当たり前じゃない。世界を自分の目で見てほしい。』父さんのそんな思いがあってここへ連れてきたの。ここで子どもらにものをあげるのが本当にいいことなの。」

今、私は広島のある劇団に入っています。今年で4年目になります。人の思いを心で受け止め、そして考え、自分の言葉で伝えていく。思いを台詞に託すだけでなく歌でも演技でも人を説得できる表現者でありたい。当時、私に芽生えた信念は今も変わっていません。

今年八十二歳を迎える祖父が話します。「日本が悪いとか、アメリカが悪いとか、そういうことじゃない。一番悪いんは人間の弱い心。今は、そう思っとる。戦争を始めるんも平和を創るんも人間なんじゃ……。」

荒廃した街から繁栄の街へと復興した広島から、私が見てきた国の現状を訴えて行きます。そして、被爆三世ということを胸に「平和を創る」活動を追い求めていきます。

様々な人への支援によって自分も成長できると感じられる、そんな人生を歩みたいと今、考えています。

この秋、仲間とともに小学校で祖父の体験を伝える機会をいただきました。精一杯の心で語ります。ここからが私の始まりです。

優 秀 賞



響け！

府中市立第一中学校

2年 定 仲 桃 香

「最優秀賞は……， 備後しんいち鬼炎太鼓です！」

湧きあがる歓声。仲間と抱き合って喜ぶ私は、いつの間にか涙を流していました。生まれて初めて流したうれし涙。頑張ってよかったと心から思った瞬間。去年のけんみん文化祭ひろしま、二〇一二和太鼓フェスティバルでの出来事です。

私は、「備後しんいち鬼炎太鼓」という、和太鼓のチームに所属しています。力を合わせることで「鬼」と化し、「炎」となって燃え尽きる演奏をモットーとし、太鼓をこよなく愛する団体です。とてもレベルが高い団体でもあるので、あの喜びの瞬間までは、本当に、苦難と努力の連続でした。なぜなら私は、曲のメンバーに入るところから挑戦しないといけなかったからです。

私が目指したのはセンター。年上の女の子とのポジション争いでした。ビデオを見ながら、毎日必死で練習した甲斐あって、私はなんとか、その座を獲得することができました。

でも、本当に大変だったのは、そこからでした。大会に向けての練習が、本格的に始まったからです。私達が演奏する曲は、「メイストーム」。台風並みの激しい五月の嵐を、音と身体でどう表現するか……。毎日の自主練で、手は豆だらけになりました。それでも練習に行くと、注意されてばかりの日々。センターである私には、自分がいい演奏をするだけでなく、みんなを一つにまとめるという責任もありました。

「いい演奏をするためには、怒られてばかりじゃだめだ。悪かったことは自分達で言い合おう。」

私は子ども達で意見を出し合い、練習方法も話し合うことにしました。いろんなことを話し合っ

て頑張った結果、チームワークも楽しさも、高まってきました。

しかし、いいことばかりではありませんでした。大会に向けての練習と同時に、たくさんの行事での演奏もあり、身体は疲労困憊。おまけに、学校の勉強も部活動の吹奏楽もあり、息つく暇ありませんでした。成績も下がってきて、正直、すごくしんどかったです。

でも私は、太鼓もクラブも勉強も、どれも諦めたくなかったのです。だからどんなに夜遅くなくても、必ず太鼓の練習はしました。

あの頃は、「どうやって時間を作るか」ということばかり考えていたように思います。

そうして迎えた本番。朝から緊張と不安でいっぱいでした。しかし演奏が始まると、すべての感情が「楽しさ」に変わったのです。

みんなが全身を使って五月の嵐の激しさを表現しています。センターの私は、「ベース」でもあるので、全体を支える気持ちでばちを振るいました。これが「一つになる」と言うことなんだ。そんな充実感でいっぱいでした。

ステージだけでなく、客席までも一つになったという一体感，達成感で、本番は終わりました。

そして八月、私達は広島県代表として、国民文化祭のステージに立ちました。あきらめずにやってきて本当に良かった……。心の底からそう思いました。

太鼓は今も私の生活の中心です。太鼓があるからいろんなことが頑張れます。そして太鼓の練習時間を作るために工夫したことで、私はたくさんのことを楽しみ、自分に合った時間の使い方ができるようになったのです。

私の打ち鳴らす太鼓よ、これからも、「響け」！

優 秀 賞



キャプテンとして

三次市立三良坂中学校

3年 下 森 大 奨

キャプテンって何なんだろうと思います。

僕は今、野球部のキャプテンをしています。三次市で優勝すること、一つでも多く勝つことを目指して、日々練習を頑張っています。

しかし、七月始め、野球の練習中に右手の薬指を骨折してしまいました。病院の先生に「今シーズンは無理かもしれない」と言われました。七月の終わりには最後の大会があるのに。どうして自分が、どうしてこの時期に、どうして。と答えのないことばかりが頭に浮かびました。あと少しで大事な最後の試合があるというところでケガをしてしまったことがとても悔しくてどうしようもない気持ちでした。でも僕は、キャプテンです。最後の試合まではグラウンドに出れなくても、ベンチからしっかりと声を出してチームを盛り上げようと気持ちを切り替えました。

ある試合の時のことです。その日は雨が降っていて、決して万全のコンディションではなく、ボールがすべり、失点もし、良くない状態でした。僕はこんな時こそと思い、雨に負けまいと無我夢中で、ベンチから声を出し続けました。試合が終わると雨が止みました。その時、チームメイトの1人が僕にこう言いました。「今さっきの雨は、大獎の悔し涙やな」と。

今でも覚えてます。僕は返す言葉が出ず、ベンチから声を出すことしかできないけれど自分の周りには、ちゃんと見てくれる人がいるのだなと思い、うれしかったです。

それからは声を出すことでマウンドもベンチも一つになれる、同じ気持ちで頑張っていけると思いました。声を出すことの大切さを知りました。そして、チームの和を大切に、みんな仲良しのチーム作りをしていました。

しかし、今度は副キャプテンから、「大獎は甘い。大獎は友達との関係のほうを気にしとる。キャプテンは、嫌われる役だぞ。」と、言われました。

キャプテンとして僕は今まで何をしてきたのだろうか？確かに僕は友達関係を大切にしてきた。でも、それは違うのか？振り返ってみると、自分はキャプテンとしての役目を果たしてきたのか、不安になりました。

そもそもキャプテンの仕事とは？キャプテンって何なんだろうというたくさんの疑問がわいてきました。思い返してみると僕は嫌われたくなくて、今まで厳しいことを言ってこなかったということに気づきました。チームのためには多少嫌われても、厳しくみんなを引っ張っていくことがキャプテンの仕事ではないかと考えました。指の骨折で悔しい思いをしましたが、そのおかげで周りのいろんな部分が見えて、引退までの自分の仕事が分かってきた気がします。

キャプテンとしてチームの先頭に立ち、しっかり引っ張っていき、責任感をもっともちたいと思います。友達との関係を野球にもちこまないこと、これはとても難しいことですが、チームメイトも分かってくれると信じています。今は試合には出れませんが、試合が全てではないことも分かりました。手がうまく使えないので練習も不自由ですが、あきらめません。キャプテンとして絶対にめげず、骨折して過ごした日々がキャプテンとして成長できる日々だと思い、頑張っていきます。そして、キャプテンとして感じた責任感、信頼、やる気、元気、さまざまな思いを後輩たちに伝え、チームの成長を願います。今は勝ちの少ないチームですが、コツコツ頑張れば必ず勝利の女神がほほ笑んでくれることを信じて、これからも練習に励みたいと思います。

優 秀 賞



音で魅せる

安芸高田市立美土里中学校

2年 田 中 瑠 実

私が5歳の頃から続けていること。それは「神楽」です。

神楽は、祖父がしていたこともあり、団の方からやってみないかと進められて、何となく始めました。そんな気持ちで取り組んでいたのですが、案の定、面白いとも思えず、しばらくたった頃には、心の中で「やめたいな」と思いながらも、母に怒られそうが続けている毎日でした。

しかし、ある出会いが私の神楽に対する気持ちを大きく変えることになります。それは、地元で行われた神楽競演大会に行った時のことです。

同じ神楽団の世良さんの笛の音に出会ったのです。それまでも何度か神楽囃子を耳にしていたのですが、世良さんの笛の音は、音の雰囲気それがそれまでと違い、まるで、音が感情を持っているようでした。

「すごい。」素直にそう感じたのです。

その笛の音を聞いているうちに、ただ何となく続けてきた私の中に目標が生まれました。「こんな笛が吹けるようになりたい」と。

そこから私の新しい挑戦が始まりました。

神楽には、楽譜がありません。歌を覚え、先輩の演奏を耳で聞いて、指使いを見て、まねをしながら、覚えていきます。伝統芸能には、「師から技を盗んで上達する」という言葉がありますが、神楽の笛も同じでした。

なかなかうまくなれなくて、思うような音も出せず、イライラしたり、めんどくさくなって、教えられていることも耳に入ってこなくなったときもありました。

それでも、世良さんの笛を聞くと、「世良さんのように吹けるようになりたい」とまた力がわいてきて、自然と指が動くようになるまであきらめず練習しました。始めた頃は、どうしたらきれいに吹けるのかばかりに気を取られていましたが、今は、場面を考えて、笛を選んだり、演ずる人の息づかいを感じながら吹くことの大切さなど、やればやるほど笛の奥深さを感じています。

今では、それぞれの演目に合わせて、自分なりのアレンジを考えて吹けるようになりました。

団の方から「笛の音に始まり、笛の音に終わるのが神楽」という言葉を教えてもらいました。確かにその通りです。大会などで、始まりの笛で大失敗すると、しばらく公演ではさせてもらえなくなることもあります。それは、笛のでき具合が、舞の全体の印象にも大きく影響するからです。とても責任の重いものだと考えるようになってきました。

神楽と出会って7年。先輩達の笛にも届いてないけれど、こちらからも続けて、いつか世良さんの笛の音のように、「聴いた人の心を揺さぶり、感動させる」そんな奏者になれるよう頑張っていきたいと思います。



僕たちの目指すもの

江田島市立能美中学校

3年 原 野 翔 馬

「原野！お前なら止められる！いけ！ー」僕の体は無意識に反応した。

PK 戦でキーパーとしてボールを止めた瞬間僕たちの県総体出場は決まった。

僕は、能美中学校のサッカー部でキーパーをしています。文武両道を目指す僕たち三年生は、県大会優勝を目指し、勉強に部活に頑張っています。朝は六時半から集まって朝練、夜は塾で遅くなるため睡眠時間は五時間ほどです。日々の授業も集中して頑張り、疲れた体に鞭を打ち、毎日の練習に励んでいました。疲れは積み重なり、良いプレーができません。先生には怒鳴られ、チームメイトからも「お前本気でやっとなか？しんどいのはお前だけじゃないんじや。新人戦で負けたの忘れたんか！」そうなのです。新人戦は僕のせいで負けたのです。何度も手の平からボールがこぼれ点を失いました。「また俺のせいで負けんのかな…。」僕は自信を無くしていました。そんな中、六月の県選手権出場をかけた試合がやってきました。しかし、僕はスタメンから外されていました。悔しいと思う自分と、逆に安堵している自分とがいました。試合は互角でしたが、試合終了直前に失点し、負けてしまいました。今まで頑張ってきたのに、うまくいかないし、もう嫌だ。サッカーなんてやめたい。練習にも身が入らなくなりました。他の部員は気持ちを切り替えて、頑張っているというのに、僕は立ち直れないままでした。

そんなある日、教室であるチームメイトに「翔馬。最近どしたんや。やる気あるんか。」不意に声をかけられました。「俺、サッカー向いてないんやわ。」弱音を吐くと、「おまえそれでええんか！俺らはこれまで県大会優勝を目指して頑張ってきたんじゃないんか。」僕ははっとしました。そして、忘れていたことを思い出したのです。文武両道でがんばるということ。熱心に指導してくれた先生を広島県一の監督にすること。そして何より、僕には心強い仲間がいるということ。そう考えると勇気が湧いてきました。

そしてやってきた八月。県総体出場をかけた試合、僕たちの三年間の全てをかけた試合が始まりました。「1番キーパー原野」僕の名前が呼ばれました。自信を持って迎えた試合前の円陣。あれほど心地よいものはありません。試合はまたもや互角。0対0で延長へ。それでも決着はつかず、PK戦を迎えました。一本止めれば勝ち。緊張のあまり、足が震えます。そんなとき、ベンチから「原野！お前なら止められる！いけー！」という声。その瞬間相手のシュートが飛んできました。「バーン」僕の手に強い衝撃が走りました。「やった！セーブした！」「ピッピッピー」試合終了のホイッスルが鳴りました。仲間が僕の元へ走ってきました。僕たちは抱き合いました。泣きながら…。

僕はこの二年半、文武両道で、広島県一を目指して頑張ることで、精神的にも随分強くなったような気がします。僕がこれまでがんばってこられたのは、仲間がいたからです。僕は1人ではなかった。いつも励まし、支えてくれる仲間がいた。そんな仲間とだから、僕はここまで頑張ってきたのだと思っています。来週、県総体があります。必ず勝って、広島県一になります。

優 秀 賞



団結すること

北広島町立千代田中学校

3年 友 田 直 哉

皆さんは、協力・団結して良かったと思ったことはありますか。僕は、今まで、「団結しろ。」とか、「もっと団結しよう。」などと言われた時には、正直、めんどくさいなと思っていました。そして、そういう時には、言われるままに、仕方なくやっているだけでした。

しかし、五月に行われた体育祭で、その考えは大きく変わりました。

僕は、体育祭では応援リーダーをしていました。練習のはじめは、三年生の団長、副団長、応援リーダーで歌やダンスを決めていきました。そのときには、なかなか意見がまとまらずに、けんかになりかけたりもしました。しかし、みんなで協力をして、意見を出し合い、なんとかまとめることが出来ました。

そして、いよいよ体育祭当日になりました。午前の部の初めの頃は、1位になろうとしていた競技で1位をとっていき、順調に得点をつみ重ねていました。しかし、綱引きで破れてしまったことで、みんなの気持ちが下向きになってしまいました。午前の部の最後の種目である学年の競技で、それは起こりました。それまで、僕達青組は練習では、いつも1位になっていたのに、本番では、最下位になってしまったのです。みんなとても悔しがっていて、中には自分のせいでまけたといって涙まで流す人もいました。これまでにない最悪のムードになってしまったのです。僕は、このままではいけないと思い、「誰のせいでもないよ。」「次、頑張ればいいじゃん。」と、みんなに声をかけました。すると、周りにいたほかのみんなも、同じような言葉を口々に言い始めました。そのときはじめて、みんな同じ目標に向かって取り組んでいるんだなあということを感じました。「一つになれた。」そう感じられたのは、そのときが初めてです。

実際に、昼食後の応援合戦では、僕達青組は、見事に立ち直りを見せて、大きな声を出し、きびきびと動き、応援合戦でも、総合でも一位になることが出来ました。あの声かけをはじめとする「団結」があったからこそその優勝だと思っています。

以前の僕のように、みんなで一緒に同じ目標に向かって進むのは、めんどくさいとか恥ずかしいという人がいるかもしれません。しかし、ぼくは、体育祭での経験から、団結することは、絶対に悪いことではないと、自信を持って言い切れます。

一度、人の手助けや支えなどをして、団結や協力といった経験をしてみてください。協力することの大切さや団結できたときの喜びも味わえると思います。

僕は、サッカー部に所属しています。部活動をする中でも、このごろますます、協力・団結の大切さを実感するようになりました。来週の土曜日、日曜日には県総体があります。そこでも、団結して優勝できるように、これからも頑張っていきます。

人は、1人で生きていくことは出来ません。家族や友人、地域の人とともに協力・団結していくことで、はじめて互いに信頼関係を築いていけるとと思います。周りの人と団結して生活し、楽しく充実した生活をこれからも送っていきたいと思います。